

第70回日本薬理学会年会印象記

矢沢和人*

第70回日本薬理学会年会は東邦大学薬学部薬理学教授 高柳一成会長のもとに平成9年3月22日から25日までの4日間、千葉幕張メッセにおいて開催された。この年会の特徴はシンポジウムの多さがあげられると思う。その数は25にもものほり、朝から晩まで最新のデータを基盤とした討論が続いた。まずオープニングシンポジウムとして「アジアの薬理学は今、そして」から始まり、「創薬と受容体」「脳虚血への血管・グリア・ニューロン応答と薬物作用」「中枢セロトニン受容体サブタイプの研究と創薬の可能性」「膜認識分子・膜修飾分子を用いた細胞機能の改変」「心臓血管系の薬理学の現状と未来への展望」「オータコイドの受容体拮抗薬・合成酵素阻害薬の特異性と有効性について」「唾液腺機能と治療の新しい展望」「新しい機能探索分子による生体機能解明へのアプローチ」「エンドセリンと循環器系調節」「気道上皮の炎症性障害及び分化増殖異常の分子機構と治療薬開発の基礎」「メカノストレスと細胞反応機構」「中枢性疾患の新しい実験動物モデルと薬物のスクリーニング」「アストロサイトのシグナル伝達と機能」「薬理学における生体ラジカル検出技術の最前線」「老化マーカーの検索とその制御」「生理活性物質をルーツとして用いた細胞内情報伝達機構の解明と創薬」「心房筋細胞の興奮伝達異常の電気生理学基盤」「脳内金属イオンと神経機能制御機構」「コリン作動性神経研究の今日的展開」「脳内活性物質と情動反応」「ラジカル反応の生理的・保護的側面」「血管平滑筋の病理と薬理」「独創的新薬の合理的設計」「薬理学の新しい研究領域」がもたれた。この様に様々な領域が網羅されていた。シンポジウムは研究の発展の

ため新たな分野を求めていく研究者にとって、総論から勉強し、各論の理解を深めていくには良い機会であると思う。また手技で疑問に思った事や壁にぶつかった時、どなたに伺ったら良いのかを知る機会でもある。

第70回薬理学会年会の印象についてであるが、筆者はここ2年間日本にいなかったので3年前の薬理学会年会と比較して感じた事を以下に示す。まず「心血管薬理」の演題数の増大という事があげられる。特に内皮細胞に対する機械刺激の及ぼす影響やエンドセリンの作用機序について報告が増えたと思われる。内皮細胞の圧刺激による細胞内情報伝達系の変化や細胞増殖の機序が注目されていると共に、循環器調節に重要な役割をしめすエンドセリンは、成人病あらため「生活習慣病」に深く関わっていると考えられるからであろう。またラジカルに関する演題もかなりの数にのぼっている。これは心血管薬理にとどまらず腎薬理、神経化学などの分野で検討されていた。ラジカルは全身の各組織に多大なる影響を与えているからである。

さらに「受容体・チャネル」の演題数も増大している。その内容も primary culture で得た細胞を用いるのではなく、受容体欠損動物やチャネルのクローニング及び発現を行うような分子生物学的手法を用いての検討が増えたことがあげられる。生体の生理及び病態生理の機序を解明すると共に薬物の作用機序を明らかにするという大命題にアプローチするには、分子生物学的方面からの検討も不可欠と思っている。しかし3年前ではこのような演題はほとんど無いに等しい状態であり、日本は世界の趨勢に遅れてしまうのではないかと危惧をしていたが、まもなくそれも杞憂に終わるのではないかと期待している。各研究室の垣根を取

*旭川医科大学薬理学講座

り払いさらに建設的な共同研究が行われる事を願う。

会場は第3日目の24日の8会場を最高に、その日以外は7会場で同時進行で開催されたため、残念ながら一部にしか参加する事が出来なかった。したがって、私が参加できなかったセッションでも大変重要な演題も多かったが、この紙面ではそれらの内容には触れられない事をお許し願いたい。

さて全体的によく運営されている学会であったが、ただ一つ気になったことがある。それはポスター発表の時間があまりにも短かったことである。ポスター掲示時間は9時30分から12時まで、そして質疑応答時間は11時から12時までであった。また午後は別のセッションで23日は15時30分から18時まで、24日は15時から17時30分までがポスター掲示時間で、これらの時間のうち後半の1時間が質疑応答時間という時間配分であった。ここに示したように午前の部と午後の部の間が少なくとも3時間は空いている。この時間をもう少しうまく使えなかったのであろうか。とてももったいなかったような気がする。時間をかけ演題内容を理解するのがポスターの主旨である。ポスターセッションは自分の専門分野以外を勉強する時間でもあると筆者は考える。質疑応答の時間は1時間でかまわないが、掲示時間が午前の部及び午後の部あと1時間づつ増やしたほうが良かったのではないだろうか。そうする事により、より一層学術的討

論、理解が盛んになったと思う。もちろん運営または会場の都合でこうなったのとはすればしかたのない事ではある。

さらに原稿を書きながら思ったことは、これからの高齢化社会という背景を考えるにつけ、薬物の慢性投与の研究に対していかなる方法論をもってアプローチをしていくのか考える事も、我々にとって重要ではないだろうかということである。単純化された系で生理、病態生理及び薬理作用の検討を行う事はとても大切である。しかし特にagingという観点から実験動物を用いた薬物慢性投与の研究もこれからは必要だと感じた第70回日本薬理学会年会であった。

最後にこの紙面をお借りして諸先生方にご案内かたがた是非ともお願いをしたい事がある。国際心臓研究学会第14回日本部会が旭川医科大学薬理学講座の安孫子教授の主催で7月17日より19日の3日間、旭川市の旭川グランドホテルにおいて行われるが、多数の先生方のご参加を賜りたい。17日にはPre-Congress Satellite Symposium "Protection against Ischemia/Reperfusion Damage"が催され、18、19日は日本部会の一般口演とミニシンポジウム「動脈硬化」を行う予定である。この学会では心血管系の生理および病態生理について多くの興味深い研究発表がなされるはずである。多数の先生方のご参加を心よりお待ちしております。